
アメイズ・アーム

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメイズ・アーム

【Nコード】

N5206T

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

レイル・ナートは、若くして軍の大尉へのし上がった。自他共に認めるエースとなった彼の元に、一つの新型機が届けられる。その新型兵器は、レイルの人生を大きく変えることになっていく……。

第一話『ロールアウト』

大尉の称号が、陽の光を浴びて輝いた。

僕の名前はレイル・ナート。このたび大尉へ昇進した。

オルゲ二軍に所属する僕は、うちが制圧している大陸の北から東とは逆に、西から南を制圧している勢力バルダー口軍と日々交戦していた。

我が軍の主力グランアーム“ヤット・ルウナー”のパイロットとして、西側戦線ではエースとしてそれなりに名が知れている。

かれこれ敵の主力グランアーム“サンボ・テージ・ヤーネ”、通称“ヤーネ”を二百機は撃墜しただろう。

この実績から僕は、“ヤーネ”のパイロットから『会いたくない敵パイロット第五位』くらいには入っているんじゃないかと思っている。

大尉に昇進した僕には、それだけじゃなくて新型の試作機が配備されることとなった。

これからの僕はその新型を駆り、『会いたくない敵パイロット第三位』くらいをまず目指そうと考えている。

目標はコツコツと、それが僕のモットーだ。

「ナート大尉、お待ちしておりました」

整備兵が敬々しく僕を出迎えた。心なしが態度がいつもと違う。

いや、当たり前か、僕はだ尉なのだから。

「新型の“エルト・エリガー”、届いてますよ」

「そうか……なんか本屋とかで『注文したものが届きました』って言われたみたいなのりに聞こえるのが気になるけど、まあいいや、早速見せてもらおう」

「はい、こちらになります」

そして僕は、その新型と対面した。

「……こ、これが」

「そうです。こちらが、約二十億カイナーを投じて製作された新型機です！」

「に、二十億？」

僕は絶句する。

別にこれは個人のために作られたわけではない。とはいえ、それだけの予算がかけられたものが、この僕に支給されたのだ。

しかし、なにより僕が驚いたのは他にある。

それはこの高額の予算に怖気ついたから余計に驚いた、というだけではない。

「でもこれ……風呂釜じゃないの？」

僕の目の前にあったのは、ステンレス製の風呂釜だった。

一昔前に流行ったデザインのそれは、妙な安っぽさと庶民的な空気をこれでもかというくらいに醸し出している。

「風呂釜って、大尉は新型機をなんだと思っているんですか！」

「いや、だってこれどう見ても、普通のグランアームと比べてみても足くらいの大きさしかないし」

「そこです。これからの新型開発は小型化が主軸。家電製品と同じで技術が進むごとに物はどんどん小型化されているんですよ」

「なんでそう庶民的な例えを出すんだ！ こいつが余計風呂釜に見えるじゃないか！」

新型機配属でドキドキしていた心臓は、整備兵へのツツコミにヒートアップして心拍数をあげていた。

「まあとにかく、これからはこの“エルト・エリガー”が大尉の愛機です。前の大尉のグランアームは基地に置いてきちゃったし」

「……こんな小さいならむしろ前のグランアーム乗せても良かったんじゃない」

「そういうわけですから、これからもエースとしての活躍期待して

ますよ！」

整備兵は去っていった。

僕は頭を悩ませる。

一時間睨めっこしたけど、どこからどう見てもやっぱりこれは風呂釜だよ……！

なんか右にスイッチついてるし。

この失望感は久しぶり、いや、始めてかもしれない。

好きなアーティストのCDの発売日だと思っただけなら実は発売が一ヶ月先だったという事実を知らされた時の経験を超える勢いだ。

「いや、待てよ」

と、冷静になって考えてみた。

「実はこれ、新しいグランアームじゃなくて新型コックピットシステムなんじゃないかな？」

そうに違いないと、僕は戦艦の中でこれに適合するグランアームを探すことにした。

風呂釜を台車で引きながら格納庫を歩いていた僕は、さっきとは違う整備兵にまず話しかけた。

「ねえ、君」

「はい？ あ、大尉！ 昇進おめでとうございます！」
思わず頬が緩むがそれどころじゃない。

「ありがとう。で早速なんだけど君、このコックピットにあうグランアームを知らない？」

「え？ コックピットも何もそれって新型機じゃ？」

「いや……僕にはどうしてもそうは見えないからさ」

「見えないって……」

「と、とにかく、僕は可能性を試してみたいんだよ！」

訝しげな表情で相手首を傾げるばかりだったが、すぐに書類を取り出して確認を始める。

「うーんと、どうだったかなー？」

整備兵はパラパラと書類をめくり、何かに気づいた。

そして僕の方に、驚愕の表情を向けてきた。

もしかして、すごいことが判明したのか？

「た、大尉！」

「ど、どうしたの！」

「後ろに猛毒の毒蜂が飛んでいます！」

「え？ うわあああ！」

すると整備兵は腰から携帯型ファイアーガンを取り出し、毒蜂を火ダルマにした。

「いやー危ない危ない、今移動してるところが密林地帯だから危険な虫なんかもよく入り込んでくるんですね」

「はあはあ、いやあ、本当に助かったよ、ありがとう！」

日の中でもがきながら死んでいく蜂を見て戦慄を覚えながら僕は素直に礼を言った。

「どういたしまして！ 大尉のお役に立てて光栄です！」

「君がいなかったら僕は二階級特進も出来なくなるくらい無様な最期を遂げるところだった。本当にありがとう」

照れくさそうに、整備兵は手を横に振る。彼は階級がまだ低いから、こんな僕でも感謝されると嬉しいのだろうな。

「あ、じゃあ私はちよつとハッチ閉めてくるよう言ってきますね！
また入ってきたら大変だし」

「ああ、気をつけて」

そして僕は、整備兵と別れた。

「結局この風呂釜はなんなんだよ！」

僕はマニュアルを自室の床に思い切り投げつけた。

第一話『ロールアウト』（後書き）

最低三話までは続けたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5206t/>

アメイズ・アーム

2011年5月24日14時25分発行